

福 井 県 医 師 会

だより

第660号 平成28年(2016)6月



福井県医師会館 竣工

## 醫 縫 録

# 福井大学医学部附属病院の現況と 医師会活動



福井大学医学部附属病院長 腰 地 孝 昭  
福井大学医師会長

熊本の市中病院から縁あって福井大学に採用され、7年が経過しました。この度、和田有司教授の後任として福井大学医学部附属病院長を拝命し、同時に福井大学医師会長となりましたので、誌面をお借りしてご挨拶を申し上げます。

私の醫縫録への寄稿は2回目、初回は福井大学医師会が創設され、県医師会の理事会に参加させていただいた時です。その後出来る範囲で理事会に参加させていただき、県医師会でどのような話題が議論されているのかを体感いたしました。とくに大中会長とは同じ心臓血管外科が専門というご縁もあり、公私ともに多大なご指導とご厚情を賜り心より感謝申し上げます。一方で、医師会から見た福井大学医学部附属病院の姿も垣間見られ、時には厳しいご指摘も受けました。しかし、大学病院という枠の中にいるだけでは経験できない多くのことを学び、また多くの方々とふれあうこともできたという点で大変有意義な時を過ごさせていただきました。重ねて感謝申し上げます。

さて前置きが長くなりましたが、福井大学医学部附属病院の現況について簡単にご説明いたします。ご承知のように全国の国立大学医学部としては最終グループとして福井医科大学が誕生し、福井大学への改組、国立大学法人化を経て附属病院の歴史もようやく30年を越えたところですが、一昨年には念願の新病棟も開院し、現在は平成30年度まで続く外来棟、中央診療棟の再整備の最中にあります。この間、シミュレーションセンターの開設、PET-MRI、ハイブリッド手術室、ロボット手術の導入などハード面での充実は目を見張るものがあります。一方で、当然ながら施設の充実は借入金返済を含む経常支出の増加に直結しますが、国立大学病院の過半数が赤字を計上する中、当院は何とか少しの黒字で持ちこたえているというのが現状です。大中会長には普段から、「補助金あつての黒字で、一般病院なら大赤字」と厳しいご指摘を受け、私も外部にいるときにはその様にも感じていました。しかし一方で、実際に大学の診療・教育・研究に携わってみますと、三足のわらじを履きながらの診療、特に今後ますます増加する国際水準の参加型臨床実習には膨大なエネルギーを必要とし、これくらいの補助金では割が合わないと感じてしまいます。

それでも、教育は改めて申すまでもなく将来の福井の医療レベルを左右する重要なものです。新専門

医制度の新しい枠組みでは、卒前教育、卒後臨床研修、専門医養成の各プログラムをシームレスにつなぐ臨床教育研修センターの活動が重要です。しかしこれは関連病院の先生方、あるいは医師会の先生方のご理解とご協力をいただかなければ成り立たないことだと考えています。残念ながら毎年多くの卒業生が出身地などの都市部に流出していますが、それでも確実に福井大学卒の県内医師数は増加し、20年、30年後の県医師会を覗いてみるとほとんどが福井大学の卒業生で占められているに違いありません。別に国粹主義が良い訳ではありませんが、福井大学の学生、卒業生に魅力ある教育、研修環境を整備し、県内での活躍の場も保証することが福井の医療を充実させ、県民の健康と幸福に資するという単純明快なロジックですので、県の行政とともに全県一致で育てていただきたいと願っています。

もう一つ、大学と医師会共通の話題として、昨年からは始まった新しい医療事故調査制度があります。近年では、医療安全の十分な理解は経営能力と並んで病院のリーダーとして必須の要件と言われていています。大学病院や基幹病院ではこれまでも医療事故、あるいはオカレンスに対して内部評価や報告が行われてきましたが、これを全医療機関に広げてプロフェッショナルオートノミーに基づく説明責任を果たすことも目的の一つだと思われます。福井県でも県医師会を中心として連絡評議会が設立されましたので、大学病院としても病理解剖、AI、外部専門委員の派遣など可能な限りの役割を果たしていきたいと思っています。

最後に、折しも今春立派な福井県医師会館が新築され、県医師会も次のステージに突入するものと思われます。大学医師会は勤務医のみで構成される、ある意味特殊な医師会かも知れませんが、少子高齢化、人口減少という避けることの出来ない現実を前に、いかにして医療という福祉の大黒柱を効率的かつ国民から信頼されるものに構造改革するか、医師会を中心とした議論の中に私たちの果たすべき役割もあると思いますので、今後ともご指導の程をよろしくお願い申し上げます。